



おちほ

第24号 平成8年3月1日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 山下 陽一

ミュージカル

クリスマスに一番欲しいもの

劇団ららら♪



皆様あけましておめでとうござ
います。今年も落穂寮並びにこの
機関紙『おちほ』をどうぞ宜しく
お願いします。

さて、去る12月22日、クリスマ
ス会が行われ、体育館は森と化し、
舞台には動物達が登場。劇団らら
ら♪によるミュージカル「クリス
マスに一番ほしいもの」の始まり
です。元気で心暖まるお話にドキ
ドキワクワク感動の75分。寮生さ
んも一緒に歌い踊り、大変楽しい
舞台となりました。

また、今年度のクリスマスのす
ごいところは、石部南小4年2組
の友達が来てくれたこと。校歌や
「翼をください」を歌って会場を
盛り上げてくれました。

さらに、なんと石部中の生徒さ
んも来てくれ、皆に手づくりクッ
キーのプレゼント。夜遅くまでか
かって焼いてくれた心の籠ったクッ
キーはとてもおいしかったです。

他に歌ありダンスあり、今年度
は本当に盛りだくさんのクリスマ
スでした。ディナーにキャンドル
サービス、そして待望のサンタさ
んからのプレゼント…。お腹もいっ
ぱい、心もいっぱい、になったか
な？

流

田村先生に教えられて

理事長 増田 正司

事にならない考え方の殆んどは、先生に注入され、育てられたものといえる。
先生の教養に、「働くとは、他を楽させる」といふ言葉がある。近江学園での最初の配属が学内中が手を焼いた問題児(三部生の指導部)だった。かなり悪い悪るの前歴の彼らに圧倒されたが、しんどい毎日を過ごすことになった。教



相談すると、「大賞成就。職員も喜ぶ、園生も喜ぶ、三部生も喜ぶ、一挙三得ではないか。」
三部生の宿舎(表荘の前に、理髪店の三色の回転灯ならぬ三色旗が、田村先生の手描きで立てられた。学内で一番悪い先生と罵られた三部生から思われていた先生の後押しもあって、全員が手分けして、閉店の準備を進めることになった。お客さんを迎えるために、いつもいっしょに加減にすませたいた掃除も念が入り、部屋の飾り付け、この試みを成功させようという意気込みが伝わってきた。

小さな園生は恐がって、近寄ろうとしなかった。一麦荘の三部生から散髪されたのが得意そうな一時を過ごしてきた。一麦荘の三部生も小さな園生達にサビエとして、満足したようだった。

評

昭和24年秋、僕は近江学園に勤めるとになり、教育長の田村先生に面接することになった。ジャンパーを着た風さいかまわぬ姿に接し、安心した。若い先生から、こづかれていたといふ聞かあったが、ついぞそんな印象を持たなかった。人一倍見する僕は、初めから親しみを感じてしまった。

育には、ずぶの素人僕は先輩の助言指導に頼るしかない。
「君は、性善説に立つか、性悪説をどうか、悪と認めなければ、三部生といえども必ず善がある。善を治そうとするより善を引き出せ」と田村先生から助言を受けた。
「三部生が学園の生活に役立つ、何かもつていないか考えてみた余暇に、お互いに散髪しあつて小綺麗に仕上げの頭をしている。これだと思つた。学内生の散髪を三部生に奉仕させてみる案を先生に

因

まなざしの人

校長 山下 陽一

昨年十一月八日、田村一二先生が訃報で没せられました。先生の警報に接して久しく、十数年前から石部町東寺のご自宅に美術講義を開いておられ、有志の方々のお話をいただき、美術史のお話や絵の指導を受けました。田村先生を慕つて入塾には、田村門下生の末席を汚しているなどと言ふほど、色を感じたわけのこととどまらず、くわらぬまに終つてしまいました。私は測り得ない不思議な方でした。おそろしくさんの人々が先生の不思議に魅了されたことだろうと思います。ご家族に、ある人から届いたお悔み之手紙を読ませていただきました。



略歴 田村二(たむら いちじ) 明治42年、舞鶴に生まれる。昭和8年、京都師範専攻科卒業。昭和8年より19年まで、京都市滋野小学校特別学担任。昭和19年より21年まで、大津市石山学園(精神薄弱児施設)勤務。昭和36年より

た。その人は学校の先生のように生かして、初めてお逢ひした時、先生の一言ひとこと、こぼれを交わす中にあり、その心のひだの奥底まで見通され、共感していただいた温いまなざしに、現在も勇氣付けられ生きている。そんな内容だったかと思ひますが、先生のあまなざしに深い感動となくさめを得た人はたくさんおられることだと思います。
美術講座に二十回参加した人達に表彰状をいたしたことになる。その数人の中に私も加えられました。その表彰状は今も大切にしておりますが、その文面の一部に次のようにあります。



席のすみっこにそのからだをもてあましてお話を聴いておりました。「のっそり」には自信共に笑つたものでした。しかし、今これを読み返すとき、何か胸に込み上げて来るものを禁じえないのです。おかしゅうてやがて哀しい、この例で、この「のっそり」は、いたるところへの先生の強いいざしといわたりだったのです。私だけでは親しくしていただいたわけではないのですが、あの先生のまなざしを通して、たちまちのうちに人の本心を見抜いてしまわれ、溝にはまらずに足の助けどころを連えずに押していただき、生氣を得た人々はいっぱいと思います。

先生の謎のようなことば「ふたつと(2)や」無為などを胸に温めつつ、畏れ多くを感して、今後寄るべとしらうと思つています。

実

地域の憩の場に

宝来板 久下 慎太郎

「成人施設化」という言葉自体初めて耳にする一任です。確かにずっとと生活している間に児童は成人となり、今既に成人は老人になり、それに相応しく成人施設や老人施設が要求されてくることは自然の成り行きですね。私がよくおっしゃっているように、あざみ寮にも幼児の頃から寮生活をさせている四十代の寮生さんも多くおられる様です。

さて、ここで正當に大切なのは、どんな施設を整備拡充を進めてより多くの方の安住の地を確保することではなく、一方で普通の社会生活をされる方が増えること、そして一般社会に住んでいると思っている我々は、ハンディを背負った人も皆一緒に住ったのが本当の一般社会なのだと思えること、それが一番です。しかしそんな理想とは程遠い現実の採用ことも事実だと思います。企業の手配にも割当て以上に一歩進んだ取組み

がされているのでしよう。地域社会はどうでしょう。我々がやっているイベントのお手伝いや休日の話し相手と、日常生活の協力は訳が違おうと思うので。皆、自分の生活に追われ精力的ゆとりを、隣人に手を貸すのに無理な状況ではないでしようか。私達の価値感を養えることが必要だと思います。

時間が必要です。遠い先の事など私には分かりませんが、やはり今の社会構造や常識の中では施設は絶対必要で且つ、とても大きな役割を果たして、と考えざるを得ません。そうだとしたら、私達らとしましては、(1)企業に通う寮生さんが居る。通学手段は現役サラーマンも含む地域ボランティア。(2)施設は開放的で誰でも利用できる。③車と外出の余暇のある人は寮生さんの外のお手伝い。(4)イベントは施設と地域と一緒に手造り一緒に楽しむ。(5)施設と地域が互の持ち味や得意技を教え合い学び合い、交流を深める場がある。

んのこともよく知らない人間の勝手な空想ごとで、がご参考いただければ幸いです。どうかは寮生さんの安全のために必要なだけに、そして明るく施設の建設に向けてご健闘を祈ります。



▲あざみ・もみじ寮生と仲良しの久下さん

在宅援助の核

石野町社區 奥野 修司

落穂寮においても入所児童の減少により、入所受け入れの対象は、より介護度の高い児童である。これは高年齢児童が中心となり、本来の精神薄弱児童施設機能が低下して施設化の成人化問題が浮上した

と思えます。

成人施設化を考えることは、現在入所児童が児童から成人、成人から高齢者になることを先取りして考えていかなくてはならないのではないでしようか。町内の他の施設でも高齢化が進んでいる状況にあります。

今後、児童から成人、成人から高齢者になる障害者を老人福祉の枠組みによって処遇するの、障害者福祉の枠組みで処遇するの、施設機能を変化させて処遇するの疑問を感じるところです。

現在、障害者の職業訓練高等部卒業後の進出路が待機型になっていきます。障害者が持つ親に対して「親なまき後の不安は誰にでもある」と思っています。親としては就労で自立して自立しない子どもをまだ頼りたいと思っているのが、現実はまだまだ障害者の受け皿が少なく、また、地域社会の中で安心して生活できる支援ネットワークや、サービスを選択できる選択肢などが少ない現状です。障害児を持つ親にとって障害者成人化は、選択肢の少ない受け皿の一つになるでしよ

成人施設化を考える

DREAMS COME TRUE.



▲石野町老人福祉センターにて仕事の中野さん

仕事

編業工務 奥野 孔雀社主兼
石野町町事所長 伊田 正信

ガソリン・スタンドも近頃は競争が激しく、怒ガラスを拭いてくれたりゴミ箱をきれいにしてくれるのは、ティッシュペーパーや洗剤を持たせてくれるなど、あの手の手の景品攻勢が客の獲得に躍起です。そんな中で、これらのサービスを一切とやめ、ただガソリンを入れるだけのスタンドが、いま、注目され始めています。も

ちろん、サービスのない分 値段は、随分、安価になりました。考えてみれば、これは当然の話で、私たちがガソリン・スタンドへ行く目的はガソリンを入れることであるはずなのに、ついこの間に、関心が本来の目的を離れて、景品合戦の華々しき目奪われるようになってきていることに気づかされます。そして、私たちが享受しているサービスも、実は、知らず知らずのうちに料金に加えられていたことが、二十一世紀はまさに私たちの目前に迫ってきました。しかし、それ

より早く、前年の西暦二〇〇〇年に落穂寮は創立五十年を前にされました。この大きな節目を迎え、落穂寮では、数年来、寮生の成人施設化移行の問題が取り沙汰されていきました。いろいろと察のご事情のある中で、さまざまな議論が積み重ねられていくと聞きま

す。仕事は高度に専門化してゆくと、敵に入り細に入りすぎるのがあって、狭小路に迷い込んでしまっ

ともありそうです。岡目八目などといいますが、こういふときは、案外、古きを温めて思い致してみれば、何か切り拓かれてくるものも知れませんが、この半世紀の間、落穂寮に求められてきたものは何かだったのか。自身が落穂寮に志したものは何だったのか。きっと、社会や障害を持つ人たちにしっかりと、とした判断断念を働いていたのだと、くれぐれも、話し合いの場で、寮の身の振り方や職員との適いつた問題が机上を賑わすだけというようなことにならないよう希望します。

古老に聞いた話です。昔は、人にはそれぞれ仕事があって、その仕事をつづけるために収入を得たものだが、近頃は、お金を得たために仕事をしているようだと、と、そのへんの、一見、昔良そうな議論もしたものです。

社会福祉協議会も施設と地域のよきパイプ役になるようにと深く感じるところです。

もう一つは、地域が開かれた施設となつてほしいと思います。このことでは、どの施設も願っています。障害者(施設)が地域社会の人たちと一緒に生きていこうと考えてくれなにして、本当の意味で障害者施設が地域生活は成り立たない。地域の中に障害者(施設)の生きを姿勢がみえる活動(外出、地域施設利用、地域行事への参加など)を施設が積極的に展開してほしいと思います。社会福祉協議会も施設と地域のよきパイプ役になるようにと深く感じるところです。



楽しみはお茶会

つくし班

矢部尚志くん、上村真希さを、
渡辺祐子さん

以上はメンバーで毎日楽しく、仲良くやっています。
午前は歩行で、約二・五kmのコースです。午後は日によって、お茶会、造形、園芸、作業学習などを行っています。月一回、短いコースですがハイキングに行ったりもしています。
みんなが大好きなのはお茶会ですね、他は、矢部君が音楽、渡辺さんが造形、村さんが紙でクシャクシャと、興味のあることが違います。バラバラで、戸惑いの毎日ですが、楽しく少しずつ頑張っています。作品を楽しく……。ち

チームワーク

あすなる班



つくし

通して、物を大切にすることを寮生に伝えながら年賀状作りにも励んでいます。粘土については、それぞれの個性を大切に、それをいかしながら、自由奔放に作ってもらっています。
これからは、寮生の心に耳を傾けながら、職員も寮生も、毎日充実した日々を送れるように、がんばっていききたいと思っています。

仕事半分 遊び半分

杉の子班



今年のある学年班は「チームワークを大切に、楽しく日課に参加する」を目標に、一年間頑張って取り組んできました。午前は午後1度大掃除をする風呂掃除、午後はカレンダー作りを中心とした造形活動・部屋の掃除や落葉拾い・草ぬきなど、この環境整備・ドライブやおおつ作り、時にはおやつ外出をしたりして楽しく過ごしてお茶会。それに新しく小麦粉を使用した小麦粉粘土など、さまざまなものに取り組んできました。あすなる班のリーダーがみんななままとめてくれ、それぞれが役割分担をこなすようになり、徐々にはありますが、チームワークがとれつつあります。これからもう一日でも早く目標が達成できるような頑張っています。ち

作品展示

石部文化ホール
平成8年3月10日～13日

歩いています

とても個性的で、活気のある寮生に囲まれながら「仕事半分、遊び半分」という気持ちを大切に、毎日取り組んでいます。取り組みの中で、杉の子班は、牛乳パックの手漕ぎの紙と粘土を中心に、日課活動を行なっています。そこでは、牛乳パックを使って手漕ぎの紙を作るというリサイクル活動を

梅組では、「空缶拾い歩行」を中心に「造形活動」「環境整備」と色々な取り組みをしています。



拾い集めて15年

梅班

空缶拾い歩行を始めたのは、15年前。一番の目的は歩い事によって寮生さん達の精神的安定をはかる事。そして毎日少しずつですが拾った空缶を集め、収益を得て、一年間の最後に梅組みんなで作るお餅を囲んだり外食をしたりして楽しむ事です。
造形活動では、昨年、石部図書館でも展示させ頂いたフランク・ガイェット。これは言葉のない寮生さん用手指を使って書用紙に書いて自分の気持ちを表現してくれています。今年はその皆の気持ちを合わせて、一枚の大きな絵にしようかとんぱっています。梅組10人の絵ででき上がりが楽しみです。

今年の竹班は、本田恭己君新しメンバーに加え、藤原貴宏君、紺谷由紀子さん、高田夏美さんの4人活動しています。作業内容も、以前から取り組んでいた木工に、新しく結び織りを始めました。紺谷さん・夏美さんは、結び織りの前段階として平織りに、本田さんは、結び織りに取り組んでいます。貴宏君は、大得意な木を削る作業の時と、紙を使って紙を切る作業をしています。布を切れる縁に違えば、と思っていますが、悪戦苦闘をしていますが、みんな、ゆっくりにではありますが、確実に自分のものに、形あるものにしていきます。新しい作業、メンバーを加えてももうすぐ一年、さて、どんな竹班になっていることやら、どら

悪戦苦闘

竹班



落穂寮創立45周年

祝南郷〜石部リレーマラソン

落穂寮は、今年創立45周年を迎えました。「45周年にあわせて何かできないだろうか」ということで考えられたのが、『南郷〜石部リレーマラソン』でした。寮生さんたちがいつもしていることで、寮生さんが得意なもの、それは歩くことであり、走ることで、というのが出発点でした。落穂寮が創設された南郷の地から、石部町の

現在の落穂寮まで約27km、これを落穂寮の全寮生さんで、走って、あるいは歩いてつなごうという企画です。

当日まで何回か練習を重ね準備は万端。いよいよ当日の朝を迎えました。当日はすがすがしい秋晴れ、気持ちのいい秋風をうけて午前8時30分南郷をスタート。それぞれの寮生さんの能力にあわせて、

二百mから三kmまでに設定された自分の担当を走り、次の寮生さんにリレーして行きます。どの寮生さんも日頃の歩行や毎朝のランニングで鍛えているだけに順調に進み、3時間15分で落穂寮にゴールすることができました。

当日はたくさんの方々、沿道からまた車中から声援していただき、ありがとうございます。寮生さん達は、ごくろうさまでした。

▽末頁になりましたが、新年あけましておめでとうございます。年頭にあたり、皆様のご多幸をお祈りいたします。

本年一月一日の読売新聞の第一面に、カラー刷りの大きな幼児の顔写真が目を引きました。そのあどけない表情を記憶しておられる方も多いことと思います。

その幼児は昨年一月十七日に阪神大震災の中で生まれました。この幼児のお母さんは、「たくさんの人々の命を注がれて生まれてきた子」と話しておられました。それはともかく、やがて一歳になるうとする笑顔が大人達を強く引きつけたのは何故だったのでしようか。

昨年は、日本でも世界でも、これほどむごいことが起きるのかといった事の連続でした。そんな中に、あの幼児のただ無心なほほ笑みとまなざしに私達のささくれた心が『ホッ』とさせられるのだと思います。

私達とはほとんど関係を持たない幼児ですが、「これから、がんばっていけよ」のことがばがけを、しないではおられません。(寮長)



泉